

## 条件表現共通調査項目解説

前田 直子

### 1. 条件表現とは

ある二つの事態において、一方の生起がもう一方の事態を引き起こすとき、両者には因果関係があると認められる。因果関係を持つ二つの事態が、事実的であれば、原因・理由表現によって表される。

・薬を飲んだので、熱が下がった。

それに対して、まだ起こっていない未来の出来事を予測したり、過去に起こらなかったことを仮定して述べる場合には、条件表現で表される。

・薬を飲めば、熱が下がるだろう。

・薬を飲めば、熱が下がったのに。

また、条件表現は、原因・理由表現と同様に事実的な場合も用いることができ、この場合は二つの出来事の時間的前後関係あるいは継起的な関係を表す。

・薬を飲んだら、熱が下がった。

条件表現とは、原因・理由表現と同じく、二つの事態の因果関係を表すが、仮定的な事態間の因果関係を表すことを主に担う表現であるといえる。

### 2. 条件表現のさまざまな形式とその相違

現代日本語の標準語には、条件表現を表す形式が複数あるが、基本的な形式は「ば」「たら」「なら」「と」の4形式、それに「ては」である。まずは「ば」「たら」「なら」「と」の4形式について、共通点・相違点を確認する。

#### 2.1 前件に関する相違

4つの形式の違いとして、まず第一に、従属節のテンスが分化しているか否か、という点がある。「なら」のみが「するなら」「したなら」という形で、非過去形と過去形の両方に接続する。

第二に、「なら」のみ、名詞に直接接続できる。ただし、名詞に直接付く「なら」は、「ば」の異形態とも考えられる。すなわち、名詞述語に「ば」が接続する際には、「名詞＋なら＋ば」となり、「ならば」は「なら」に置き換えることができるからである。

第三に、「のだ」への接続の可否であり、「たら」「なら」は可能(=のだったら・のなら)である。「ば」は「のならば」と可能であるが、この場合「のなら」との違いが明

確でない。「のであれば」の場合は、可能である。「と」は不可能である(=\*のだと)。

第四に、丁寧体に接続できるかどうか、という点である。「たら」「と」は丁寧体に接続が可能であるが(=しますと、しましたら)、「なら」は不可能ではないが(=ますなら・ましたなら)、丁寧体に接続すると丁寧度が過度になり、使用頻度は高くない。「ば」はほぼ不可能と言える。

	ば	たら	なら	と
① 従属節テンスの分化	×	×	○	×
② 名詞への直接の接続	×	×	○	×
③ 「のだ」への接続	○	○	○	×
④ 丁寧形との接続	×	○	△	○

### 2.3 後件に関する相違

4つの形式は、後件に命令・依頼・禁止などの働きかけを表すモダリティ表現が来る場合に使用できるかどうか、という点で違いがある。次のように、後件に命令が来る場合は、「たら」「なら」は使用可能であるが「ば」や「と」は使用できない。

- ・ご飯を食べたら、歯を磨きなさい。(動詞述語, 命令)
- ・ご飯を食べるなら、手を洗いなさい。(動詞述語, 命令)

これらの「たら・なら」を「ば」や「と」に置き換えることはできない。これを「条件表現のモダリティ制限(制約)」と呼ぶ。

このモダリティ制限は「ば」については次のように解除されることがある。

- ・道がわからな {ければ/かったら}、電話をしてくれ。(状態性動詞述語, 依頼)
- ・欲し {ければ/かったら}、自分で買いなさい。

前件の述語が状態性述語の場合、「ば」も許容される。ただし、「と」は不可能である。

また、後件に過去の事実が来る場合、「たら」「と」は可能であるが、「なら」は不可能である。

- ・ボタンを押すと水が出た。
- ・ボタンを押したら水が出た。

「ば」は不可能ではないが、意味が異なる。「と・たら」が一回性の過去の事実を表せるのに対し、「ば」では、反復・習慣的解釈、または反事実的解釈になる。

- ・ボタンを押せば水が出た。= いつも必ず
- ・ボタンを押せば水が出たのに。

	ば	たら	なら	と
① モダリティ制限	△	×	×	○
② 文末の過去テンス(事実的条件)	△	○	×	○

### 2.3 意味的相違

第一の違いは、時間的前後関係における違いである。条件表現は前件と後件の因果関係を表すが、一般に原因は結果より先に起こるものであり、「ば」「と」「たら」でも前件は後件より先に生起する。

・ボタンを{押せば・押すと・押したら}、水が出る。

それに対して「なら」では、逆の時間的關係や、あるいは前件と後件が同時的な場合も表すことができる。

・映画に行くなら、前売り券を買ったほうがいい。

・映画に行くなら、私も行きたい。

これは「なら」がテンスの分化を持ち、「るなら・たなら」の両方が可能であるためである。「たなら」の場合は、他の3形式と同様の時間的關係を表す。

・彼が盗んだなら、彼に責任をとってもらいましょう。

ただし、この時間的な前後関係が出るのは前件が動的述語の場合である。前件が状態性述語の場合は、「ば」「と」「たら」でも同時的な関係を表す。

・お金が{なければ・なかったら・ないと}買えない。

「ば」「と」「たら」は、時間的前後関係については違いがないが、前件と後件の関係が、個別的・一時的なものか、それとも一般的・恒常的なものかという時間的限定性において違いがある。

・春になれば、桜が咲く。

・春になると、桜が咲く。

・春になったら、桜が咲く。

この3者のうち、「ば」「と」の文は、「春になる」ことと「桜が咲く」ことが毎年繰り返される自然現象として一般的・恒常的な関係を表すというニュアンスを持つのに対し、「たら」の場合は「次に来る春」を話している文脈において使われるニュアンスがある。

「ば」と「と」は、時間的限定性において、違いがないが、後件の反期待性においては違いがある。

・ふざけて{いれば/いると}、叱られるよ。

・暗い所で本を{読めば/読むと}、目が悪くなる。

後件に望ましくない事態が来て、その事態が実現されないことが期待される場合は「と」の方が適切である。上のような文も「ば」であれば前件と後件の必然的・一般的な関係として表現されるが、「警告」として発せられる場合には「と」の方が適切である。逆に言えば「ば」は後件が望ましい事態の時に適切になる。次のように疑問語が前件に来て、後件を実現させるために必要な事態を尋ねる場合には、「ば」が使われる。「ば」は後件実現のために必要な事態を表す。

・どうすれば、病気がなおりますか？

それに対して、疑問語が後件に来る場合は「ば」ではなく「と」「たら」が用いられる。

・病気になったら、どうしますか？

・このボタンを押すと、どうなりますか？

	ば	たら	なら	と
時間的前後関係：動的述語では常に前件が先	○	○	×	○
時間的限定性：限定性がなく超時的	○	×	×	○
後件の反期待性：後件に望ましくないものが可能	×	○	×	○

## 2.4 その他の条件表現形式

条件表現には、「ば・なら・と・たら」の他に、「～とする」を伴う「とすれば・とすると・となると」がある。これらは基本的に仮定的表見を表す。また、「形式名詞」を伴う「くらいなら、ことなら、しようものなら、(ない) ことには」や「場合・限り」なども仮定条件を表す。さらには「ては・てこそ」というテ形にとりたて助詞が付加した形式もある。

## 3. 条件表現の用法

1節で見たように、条件表現は仮定的な因果関係を表すことを主な働きとするが、それ以外の用法も持つ。条件表現形式はどのような用法を持つのだろうか。条件表現を表す諸形式の相違点について論じることは、同時に条件表現のさまざまな用法を区別・分類していくことでもある。ここでは条件表現の用法を分類する。

条件表現の前件・後件は、まだ起こっていない事態である場合もあれば、既に起こっている場合もあり、また、決して起こりえない事態（反事実的な事態）の場合もある。このような事態と現実との関係をレアリティと呼ぶと、レアリティは次のように分けられる。



条件表現は、複文の従属節として機能する従属節用法と、いわゆる助詞や助動詞と同等の文法的機能を表す複合的な形式を構成する文法化した非従属節用法がある。

従属節用法は、前件および後件のレアリティによって、次のように分類できる。

従属節用法			
仮定的	反事実	前件=事実	お茶が飲みたい <u>なら</u> 、買ってきたのに。
		前件=反事実	ボタンを押せば、水が出たのに。
	仮説(予測的)	前件=仮説	ボタンを押せば、水が出るだろう。
		前件=事実	ここまで来れば、警察も追ってこないだろう。
非仮定的	多回的	一般・恒常	氷が溶けると、水になる。
		反復・習慣	お酒を飲む <u>と</u> 、頭が痛くなる／なった。
	事實的・一回的	連続	部屋に入ると、コートを脱いだ。
		きっかけ	兄が叱ると、妹は泣き出した。
		発現	本を読んでいる <u>と</u> 、電話が鳴った。
	発見	ドアを開けると、警官が立っていた。	
非従属節用法			
並列・列挙			日本人もいれば、留学生もいる。
評価的用法			薬を飲め <u>ば</u> いい。
終助詞的用法			薬を飲め <u>ば</u> ？
後置詞的用法			佐藤さんと言え <u>ば</u> 、最近、見ないね。
接続詞的用法			できれば・ひよっとすると・だったら

## 5. 共通調査項目の解説

前節で見たように、条件表現をまずは、従属節用法と非従属節用法に分け、さらにそれぞれについて調査項目の例文の解説を加える。

### 1 従属節用法

#### 1-1. 仮説的用法(予測的条件)

<基本用法>(接続調査, 後件のモダリティ制限調査を兼ねる)

仮説的用法とは、前件の未実現事態が実現した場合に生起する結果を後件に述べるものである。もっとも典型的な条件文であり、予測的条件文と呼ばれることがある。

調査例文(01)~(21)は、仮説的用法の調査であり、このうち、(01)~(05)は前件述語の接続調査である。後件は全て推量表現の平叙文である。

- (01) あした雨が降れば, 船は出ないだろう。(動詞述語, 推量) <GAJ178>
- (02) あした雨が降らなければ, 船は出るだろう。(動詞否定述語, 推量)
- (03) あした波が高ければ, 船は出ないだろう。(形容詞述語, 推量)
- (04) あした波が静か {であれば/なら}, 船は出るだろう。(形容動詞述語, 推量)
- (05) あした雨 {であれば/なら}, 船は出ないだろう。(名詞述語, 推量)

#### 【前件が仮説でなく事実】

仮説的条件のうち、前件が実現している事実的な場合がある。(06)はコ系の指示詞が使われることによって、前件の事実性が示されている。後件は未実現の推量である。

\* (06) これだけ降れば, 水不足にはならないだろう。(動詞述語: 前件が事実, 推量)

### 【～さえ～ば】

仮説的条件は「ば」「なら」「と」「たら」全てで表すことができるが、「ば」は、(07)のように「～さえ～すれば」という構文、すなわち前件の条件が最低限必要な唯一の条件であり、他の条件が不要であることを表す場合にふさわしく、「ば」はとりたて助詞「さえ」を含まなくてもこのニュアンスを示すこともある。

\* (07) 雨さえ止めば, 船は出るだろう。(動詞述語: 最低条件, 推量)

### 【モダリティ制限】

「ば」と「と」は後件にモダリティ制限があり、後件に命令・依頼・勧誘などの働きかけ表現や希望・意志の表現は使いにくく、そうした場合は(08)～(14)のように「たら」が用いられる。ただし、(11)のように前件述語が状態性の場合、モダリティ制約は解除され、「ば」も用いられることがある。

(08) 努力すれば, できるようになる。(動詞述語, 断定)

(09) ご飯を食べたら, 歯を磨け。(動詞述語, 命令)

(10) 駅に着いたら, 電話をしてくれ。(動作性動詞述語, 依頼)

(11) 道がわからな {ければ/かったら}, 電話をしてくれ。(状態性動詞述語, 依頼)

(12) 大人になったら, パイロットになりたい。(動詞述語, 希望)

(13) [独り言で] これが終わったら, ちょっと休憩しよう。(動詞述語, 意志)

(14) 仕事が終わったら, 飲みに行こうよ。(動詞述語, 勧誘)

### <後件の反期待性>

後件に望ましくない事態が来る場合、「ば」は用いられにくく、(15)(16)に見るように、代わりに「と」や「たら」が用いられる。ただし、前件述語が状態性である場合には、モダリティ制限と同様に「ば」が可能になる。

(15) そんな暗いところで本を読 {んだら/むと}, 目を悪くするよ。(警告)

(16) お前が行 {ったら/くと}, その話はだめになりそうだ。(懸念) (GAJ182)

(17) お前が行 {かなければ/かないと}, その話はだめになりそうだ。(懸念)

### <疑問語との共起>

「ば」は前件に疑問語が来るのに対し、「と」は後件に疑問語が来る。「ば」は後件が実現するための望ましい条件を提示するので、それを尋ねる疑問表現が前件に来ることができる。「と」は前件から自然発生的に生起する事態を示すので、前件は確定している事態が必要になる。「たら」はいずれにも用いられる。

- (18) どのボタンを押 {せば/したら}, おつりが出る? (従属節)  
 \*(19) だれに聞 {けば/いたら}, わかるかな。(従属節)  
 \*(20) いつなら, 来られる? (疑問語に後接)  
 (21) このボタンを押 {したら/すと}, どうなる? (主節)

## 1-2. 仮説的用法 (認識的条件: 「なら」の独自用法)

「なら」は「ば・と・たら」とは異なる性質を持つ特殊な条件形式である。

### <認識的条件文: 前件は受け取ったばかりの情報> (接続調査を兼ねる)

「なら」は前件に受け取ったばかりの情報を提示する場合に特徴的に用いられる。前件事態は(22)のように、仮説的で未実現の場合もあるが、(23)~(26)のように既に実現している事実的な場合が典型的である。(22)も事態としては未実現であるが、すでに成立することがほぼ定まっているような場合であり(例えば「予定」として決まっている)、その意味では、(23)~(26)のように、前件自体が生起している場合に準じると考えられている。こうした条件文では、前件事態そのものは、既に実現している(または実現が確実である)が、その真偽に付いては話し手は知らず、話し手の認識においてはまだ未知の事態である。このような条件文は認識的条件文と呼ばれ、「なら」に特徴的な用法であるが、「ば」や「たら」によっても表すことは可能である。

・もし今、事務所にいれば、電話に出してくれるだろう。

「なら」は他の三形式とは異なり、過去形にも接続できることが、こうした条件文を可能にしている。

- (22) 今日の飲み会、山本さんが来るなら, 私も行こうかな。(動詞述語・予定)  
 (23) [隣の家に泥棒が入ったと聞いて] 隣に入ったなら, うちも気をつけないとい  
 けないな。(動詞過去形述語・過去の事実)  
 (24) [値段を聞いて] そんなに高いなら, 買わない。(形容詞述語) <GAJ89改>  
 (25) そこがそんなに静かなら, おれも住んでみたい。(形容動詞述語) <GAJ90>  
 (26) そんなにおもしろい本なら, おれも読みたい。(名詞述語)

この場合、「のなら(んなら)」が用いられることも多い。

### <前件と後件の時間的前後関係>

「なら」のもう一つの特徴も、やはり「なら」が前件にテンスの分化を持つことと関わる。一般的に条件と帰結は、(29)のように条件の方が帰結より先に生起するものであるが、「なら」の場合は(27)のように、前件が後に生起する場合や、(28)のように同時に生起する場合もある。この「なら」は「のなら(んなら)」になることも多い。

- (27) [自分が今読んでいる本を読みたそうにしている友人に]

読む(の)なら, 貸すよ。(後件→前件, 申し出)

- \* (28) 手紙を書く(の)なら, 字をきれいに書いてくれ。(前件=後件, 依頼) <GAJ88>

\* (29) 郵便局に行く(の)なら, 切手を買ってきてくれ。(前件→後件, 依頼)

### 1-3. 反事実的条件

前件も後件も事実と反する場合を、反事実的条件と呼ぶ。反事実的条件文の場合、(31)のように前件に継続相「ている」形が出現することがある。

(30) もっと早く来れば, 間に合ったのに。

\* (31) もっと注意していれば, けがはしなかつただろうに。

また仮説的条件において、前件が事実である場合があったように、反事実的条件にも前件のみが事実である場合もある。

\* (32) こんなに寒いなら, コートを着て来るんだった。(前件が事実)

### 1-4. 一般条件

前件と後件の因果関係が、時間軸上の特定の時点に位置づけられず、そうした事態が一般的・恒常的に起こることを表す場合を一般条件という。主体は不特定であり、後件にテンスの分化はなく、常に超時を表す非過去形で用いられる。

(33) 氷が溶ければ／ると, 水になる。(自然)

\* (34) だれだって年を取れば／ると, 具合の悪いところも出てくる。(人事)

### 1-5. 反復習慣

反復習慣は、一般条件と同じく、因果関係が時間軸上の特定の時点に位置づけられず、反復的に生起することを表すが、一般条件とは異なり、特定の主体の持つ習慣としての反復であり、後件に過去形も出現し、過去における反復習慣を表すことも可能である。

(35) あの人の家に行くと, いつもごちそうしてくれる。(現在) (preGAJ152)

\* (36) 昔は, 学校から帰ると, 毎日家の手伝いをしたものだ。(過去)

### 1-6. 前置き

「ば」や「と」は、「思う・考える・言う」などの思考・発話を表す動詞に接続して、前置き表現として使われることがある。(37)では、後件の内容「若いころはずいぶんむちゃをしたなあ」が、前件の「思う」という「思考」の内容であることを表す。前件「今から思えば」は、次に述べる後件が思考の内容であることを前触れとして示す機能があり、思考や発話の行為自体は、発話時に行われたものと考えられる。

(37) 今思えば, 若いころはずいぶんむちゃをしたなあ。

### 1-7. 事実的用法

前件も後件も1回実現した事実である場合を事実的用法と呼ぶ。事実的用法は前件と後件が動きを表すか状態を表すかによって、次のように分けられる。

(38)のように、前件が動作、後件が状態を表す継続相の場合、前件の動作によって後件

の状態を発見したということを表す。前件は後件の状態を発見するための動きである。逆に(39)のように、前件が状態、後件が動きである場合、前件の状態の最中に後件が生じたことを表す。

(38) そこへ行ったら、もう会は終わっていた。(発見)(GAJ184)

\* (39) 昨日、散歩をしていたら、急に雨が降ってきた。(発現)

前件後件ともに動きである場合は、(40)のように、前件と後件の主体が異なる場合と(41)のように、主体が同一である場合に分けられる。前者の場合、前件の動作によって後件が引き起こされるという関係を表し、前件は後件のきっかけとなっている。後者の場合は、同一主体の連続する二つの動きを表す。

\* (40) 犬にえさをやったら、喜んで食べた。(きっかけ)

\* (41) [眠れないと思ったけれど] 布団に入ったら、すぐ寝てしまった。(連続)

後件が動きや状態ではなく、話し手の評価を表す場合もある。この場合も後件は話し手の評価としてすでに確定している。(42)のように、前件事態が実現したことから自然に後件の評価が生まれたことを表す場合は「と」が用いられる。また、(43)のように「ば」を用いると、それだけで十分だ、それ以上は望まない、という高い評価を表す(cf.「～さえ～ば」)。

(42) 冷やして飲むと、おいしいね。(評価)

(43) [難しい試験で80点を取った子どもに]

いや、それだけできれば、たいしたものだよ。(評価)

事実的条件は、「と」や「たら」によって表されるのが基本であるが、「ば」も(44)のように、同一主体の連続的な事態が反復して起こることを表す場合には、可能である。この場合、事態そのものは過去に生起しているが、後件末は反復性を表し、過去の一時点に位置づけることができないため、非過去形(=蜂に刺される・蛇に咬まれる)が用いられる。

(44) 畑に行けば蜂に刺されるし、山に行けばへびに咬まれるし、たいへんな目にあつた。(事態の連続の反復)

## 1-8. 並列・列挙用法

「ば」「なら」は存在や属性が併存していることを表す並列・列挙の用法を持つ。(46)(67)のように「なら」であらわれるのは、名詞述語または形容動詞述語の場合であり、「なら」ははコピュラ(判定詞)「だ」の「ば」形である。

(45) 机の上には、リンゴもあれば、柿もある。(同時成立)

(46) 江戸が政治の中心なら、大坂は商業の中心だ。(対比)

(47) 親も親なら子ども子だ。

## 1-9. テワ類調査項目(テワ類の形式がある場合確認)

テワ形に「は」が付いた形「ては」は、条件を表す。「ては」には仮定条件を表す場合と、

反復を表す場合がある。仮定条件の用法では、後件の評価性に制約があり、後件には望ましくない事態が来る。

また反復は、前件の動きが後件を引き起こすという事態が反復して起こることを表す。動きの反復であるため動詞のみが出現し、しかも肯定しか現れない。

#### <仮定条件>

- (48) そんな暗いところで本を読んでは、目を悪くするよ。(=(15)) (警告)
- (49) お前が行っては、その話はだめになりそうだ。(=(16)) (懸念) <GAJ182>
- (50) お前が行かなくては、その話はだめになりそうだ。(=(17)) (懸念)
- (51) こんなに雨が降っては、仕事にならない。(動詞述語)
- (52) こんなに頭が痛くては、働けない。(形容詞述語)
- (53) こんなに静かでは、落ち着かない。(形容動詞述語)
- (54) こんなに小さな子どもでは、この荷物は持てない。(名詞述語)

#### <反復>

- (55) 何度も振り返っては手を振った。
- (56) 子どもの頃は、いたずらをしては、先生に怒られた。
- (57) 書いては破り、破っては書き、やっと手紙を書き上げた。

## 2. 非従属節用法

### 2-1. 助動詞的用法

条件表現「ば」「と」「たら」に「いい」「いけない」などの評価を表す形容詞が後続し、全体として当為的判断あるいは評価のモダリティを表す助動詞的な複合形式を構成することができる。前件には肯定が来る場合と否定が来る場合があり、後件に肯定の「いい」、否定の「いけない」が来る場合があり、その組み合わせは次のようになる。

前件	後件	例文
① 肯定 +	肯定・非過去形 →	すればいい (勧め・願望・不満) 60・62・63・64
② 否定 +	肯定・非過去形 →	しなければいい (勧め・願望) 61
③ 肯定 +	否定・非過去形 →	してはいけない (禁止) 66・67
④ 否定 +	否定・非過去形 →	しなければいけない (義務) 65
⑤ 肯定・否定 +	肯定・過去形 →	すればよかった (後悔) 58
⑥ 肯定・否定 +	肯定・過去形 →	しなければよかった (後悔) 59

(58)(59)は後件が過去形であり、上表の⑤および⑥に該当するが、この場合は反事実的な事態が表される。話し手は、実現しなかった事態に対して、その実現を望むが、しかし実現は不可能であることことを表し、話し手の後悔や不満が表される。「ば」がもっともふさわしいが「たら」は可能である。反事実的であるので、「と」は出現しにくい。

(58) もっと早く起きればよかった。(反事実的・後悔)〈GAJ078〉

(59) あんなどころに行かなければよかった。(反事実的・後悔・動詞否定述語)〈GAJ185〉

(60)は①に該当し、後件は非過去形であるが「のに」が付くことによって、やはり事態は反事実的であることが示される。

(60) もっと安ければいいのに。(反事実的・不満・形容詞述語)

(61)は②に該当し、前件が否定形であり、しないことを勧める表現である。「ば」を用いると、それだけで十分であり、他の条件は不要であるというニュアンスが生じる。

(61) やせたいなら、食べなければいいじゃないか。(必要十分)

(62)は①に該当し、前件に疑問語が来る場合で、「ば」や「たら」が用いられる。

(62) どうすればいいかわからない。(困惑)

「と」は(63)のように、二人称主体の仮説的な動きに接続し、その行為を勧めることを表す。(63)は①に該当し、「ば」でも可能だが、「ば」を用いると、それが必要十分な事態であるという意味になる。「と」の場合はそうしたニュアンスはなく、聞き手に利益となる行為を一つ示すのみである。

(63) [体の弱い友だちに勧める] あの温泉に行くといいよ。(勧め)〈preGAJ037〉

(64)も①に該当するが、三人称主体の事態になると、その事態の生起を願望する意味になる。

(64) 明日は晴れ{れば／ると}いいなあ。(願望)

(65)は④、(66)は③に該当し、それぞれ義務および禁止の意味を表す。(68)は形態的には肯定形であるが、意味的には否定形であり、(66)と同じく、禁止の意味を表す。

(65) 私はあした役場に行かなければならぬ。(義務)〈GAJ154改〉

(66) そっちへ行ってはいけない。(禁止)〈GAJ153〉

\* (67) ここで煙草を吸ってはダメだ。(禁止)

## 2-2. 終助詞的用法

「ば」「たら」はそこで文が終わる終助詞的な用法を持つ。二人称主体の動作の場合、(68)のように「たら」を用いると、勧めを表すが、(67)のように「ば」を用いると、聞き手の利益のために動作を勧めるのではなく、相手がしようとする動きを話し手が止めない、あるいは話し手が関知しないという、突き放した、冷淡な話し手の態度が表される。(70)「つてば」や(69)「つたら」は、事態を聞き手に強く認識させるニュアンスを持つ。「つ(て)」の部分には引用の「と」と関わり、その前には平叙文も命令文も可能である。

(68) [お菓子をすすめて] こっちのも食べたら。(勧め)

(67) やりたいなら勝手にやれば。(突き放し)

\* (70) [リモコンの置き場所をなかなか覚えない相手に]

何度言ったらわかるの。ここにあるつてば。(再確認の要求・叙述)

\* (71) [一度止めたのにそれでも行こうとする子どもに]

そっちへは行くなつたら。(再確認の要求・禁止)

### 2-3. 接続詞的用法

「ば・と・たら・ては」は次のように接続詞を構成することがある。「ば・と・たら」はソ系の指示詞を伴う必要があるが、(79)は慣用的に固定化した接続詞である。一方「ては」は「では(じゃあ)」という形で、単独でも接続詞として機能する。

(72)(78)は接続詞と言うより、前の文脈をソ系指示詞で受けた従属節の延長であると考えられ、それぞれ仮説的・事実的な場合と見なせるが、(73)(74)や(77)は、接続詞化して、前の文脈から下される推論を表す。さらに(75)(76)のようになると、もはや条件表現との関係は認められず、新たな状況・場面への転換を宣言する接続詞となる。

- (72) この道をまっすぐに行け。そうすれば、郵便局があるから。(従属節的)
- (73) A「私は昭和元年生まれだ。」  
B「そうすると、私より五つ上だね。」(解釈・推論)
- (74) A「これ使うなら持って行っていいよ。」  
B「じゃあ、悪いけどちょっと借りるね。」(態度表明)
- (75) [会合の始まりに] では、始めます。(転換)
- (76) [別れのあいさつで] では、さようなら。(転換)
- (77) 約束は明日だった? じゃあ、私は間違っていた。今日だと思っていた。(推論)
- (78) 6時に着いた。そうしたら、もう会は終わっていた。(事実的)
- \* (79) もしかしたら、あいつは来ないかもしれない。

#### 参考文献

- 有田節子(2007)『日本語条件文と時制節性』くろしお出版
- 高梨信乃(1995)「スロトイイとスレバイイとシタライイ」『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6:第11部 複文』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法:第12部 談話・第13部 待遇表現』くろしお出版
- 蓮沼昭子(1987)「条件文における日常的推論 —「テハ」と「バ」の選択要因をめぐって—」『国語学』150
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版
- 浜田麻里(1991)「「デハ」の機能」『阪大日本語研究』3
- 日高水穂(1999)「秋田方言の仮定表現をめぐって —バ・タラ・タバ・タッキヤの意味記述と地域的標準語の実態—」『秋田大学教育文化学部紀要 人文科学・社会科学』54
- 日高水穂(1999)「ことばに関するアンケート調査1997-1998:仮定表現「～バ」の適格性」『秋田大学ことばの調査』1, 秋田大学教育文化学部日本・アジア文化研究室
- 前田直子(2009)『日本語の複文 —条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版
- 三井はるみ(2002)「条件表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』科学研究費補助金研究成果報告書